

JA 全農 ET センターニュース 15 年 7 月号

平成 15 年 7 月 1 日

今月号は胚移植国際学会誌の 15 年 6 月号に発表された乳牛の人工授精による受胎率の低下に関する報告を紹介させていただきます。

「乳牛の人工授精による受胎率は低下しつづけているか？スペイン北東部 10 年間の受胎率調査について」スペイン Lleida 大学の Lopez-Gatius, F の内容を引用いたします。

1991 年から 2000 年までの 10 年間の人工授精による経産乳牛の初回授精受胎率（受胎牛/授精頭数）ならびに分娩後 45-70 日目に繁殖検診を実施し、卵巢および子宮疾患の有無を調査した。1991 年の受胎率は 42.3%であったが、年ごとに減少し、2000 年のそれは 33.1%であった。冬季の受胎率は 1991 年：46.0%で、2000 年：43.1%と大きな減少は認められなかった。しかしながら、夏季の受胎率は 1991 年：36.4%で 2000 年：22.1%と年々大幅な減少が認められた。また 1 頭あたり平均乳量は 1991 年 7,800Kg から 2000 年 10,200Kg と大幅な伸びを示している。卵巢静止の発生率は 1991 年 1.6%であったが、2000 年には 11.8%に増加した。卵巢のう腫の発生割合は 6.0%から 8.1%と 10 年間で大きな変動はみとめられなかった。子宮疾患の発生割合は 1991 年 4.2%から 2000 年 1.8%と減少している。特に、注目すべきは夏季における卵巢静止の発生割合で 1991 年：2.7%であったものが、2000 年には 19.3%に増加している。

年度	1991	1995	2000
受胎率	42.3%	36.8%	33.1%
夏季受胎率	36.4%	30.4%	22.1%
冬季受胎率	46.0%	45.0%	43.1%
卵巢静止	1.6%	6.4%	11.8%
卵巢のう腫	7.6%	6.8%	8.1%
子宮疾患	4.2%	2.5%	1.8%
年間平均乳量	7,800Kg	8,900Kg	10,200Kg

以上の結果より、この 10 年間で発情兆候の認められる経産乳牛の割合は特に夏季において減少し、その最大要因は夏季における卵巢静止の発生頻度の増加である。また人工授精による受胎率の低下も、特に夏季における低下が顕著であると報告しています。とくに暑い時期における飼養管理面からの種々ストレスの軽減対策の必要性を報告しております。